

巻頭言

「蛋・核・酵」



TAGAWA Yuichi

細菌・寄生虫研究領域長 田川 裕一

4

月の下旬になって本当に久し振りに図書室へ行き、いくつかの雑誌を手にとってページを捲っていると、長年愛読していた『蛋白質・核酸・酵素』というライフサイエンスのレビュー雑誌の新しい号がないことに気付きました。さては、図書費が厳しい折から、購読中止の対象となったのかと思い、尋ねたところ、昨年から休刊となったとの返事でした。長年の友がいなくなっていたことに寂しさを感じるとともに、「休刊になったことさえ知らなかったとはなんと情けない」、「このところ本当に余裕なかったな」、「そう言えば、同じ分野の後発のレビュー雑誌に圧されていたな」などと思いながら、暫しの間呆然としてしまいました。発行元の出版社では、発行継続のための努力を重ねていたようですが、急な休刊の運びとなったそうです。

『蛋・核・酵』誌との出会いはもう35年以上前、まだ大学生の頃、感染症や免疫のことに興味があったために微生物学教室に入って間もなくのことでしたが、書店でたまたまインターフェロンに関する記事が目について購入したのが始まりでした。仕送り、奨学金と少額のバイト代で生活する学生の身分としては毎月購入するのはちょっと厳しかったのですが、何とかやりくりして購読していました。大学院では細胞の初代培養とウイルスの中和試験に明け暮れる日々の中で、ライフサイエンス分野の生化学・分子生物学的な解説がとても新鮮に感じられたことを覚えています。研究するなら、蛋白質や核酸、酵素を扱って、もっとおもしろそうな実験をやってみたいと憧れました。その頃、岩波書店から刊行された現代生物学講座

シリーズも大きな出費でしたが、愛読したことを覚えていています。ライフサイエンスが盛んになっていく雰囲気雑誌や書物を通して強く感じながら、若さ故だったのでしょうか、自分が毎日やっている実験とのギャップの大きさに苛立っている頃でした。

やる気があれば、どこでも研究はできると思い込んで仕事に就いたおかげで、どうにか本代には不自由なくなり、毎月『蛋・核・酵』誌を楽に購読できるようになりました。就職して2年目に派遣された研修先で、鶏の皮膚から優勢に分離されたブドウ球菌属のある種の株が、分離菌数の少なかった別の種の発育を抑制する現象を見つけました。これにバクテリオシンが関与するかもしれないと思い立ち、関与する物質の分離・精製に汗を流しましたが、そのきっかけは、『蛋・核・酵』誌にバクテリオシンに関する特集があったことを思い出したためでした。特集のひとつひとつの記事に夢中で目を通して、実験計画を立てる参考にしたことは懐かしい記憶です。この時の経験が、自らが全てを発想し、思考し、結論を得るという研究の原体験となりました。

いくつかの社会経験を積んだのち、縁あって、前述の研修先の研究所に研究員として勤めることになりました。意気込んで研究を始めたものの、なかなか思うような成果が得られずに意気消沈することもありました。そんな時、『蛋・核・酵』誌のページを捲って目についた記事を読むと、その内容が自分の研究とは直接関係しないものであっても、背景にある考え方が刺激となり、気力を保つ助けのひとつとなりました。おそらく、長期の海外出張のため

に購読を休んだのがきっかけだったと思いますが、研究所でこの雑誌を定期購読していたこともあって、自ら購入することはなくなっていました。ちょっと墮落したなと感じながらも、毎月図書室でどんな記事が掲載されているのかを見るのを楽しみにしていました。

しばらくすると、図書室で同じ分野のレビュー雑誌2誌を目にするようになりました。これら2誌はその時々ホットな話題をうまく取り上げており、また記事も読みやすいことから、今でもしっかり楽しませてもらっていますが、相前後して同じようなトピックを紹介することになりがちでした。それに比べて、『蛋・核・酵』誌はほぼ変わらない体裁と独自の内容で刊行されていると感じていました。歴史ある故に、変わらぬ編集方針があったということだと思いますが、何とか休刊にならずに済む方策がなかったのかとやはり残念です。

動物衛生研究所は平成23年4月から本所で3つ、支所等で3つの計6つの研究領域を設けて、研究をスタートさせました。動衛研の本所の細菌・寄生虫関係の研究員はこれまでいくつかの研究部や研究チームに分かれて研究活動を行ってきましたが、今回初めてひとつの組織単位、すなわち細菌・寄生虫研究領域にまとまることになりました。研究領域の19名の仲間がそれぞれの力をさらに磨き、その力を存分に発揮できるように研究環境の整備に努めたいと思っています。そして細菌・寄生虫研究分野においてどのような成果を発信していく必要があるのか、そのためにはどのような研究活動を強化していくのかをしっかりと考えながら、私達の研究成果の発信を皆さんにいつも楽しみにしてもらえようように研究を進めていきたいと思っています。ご支援のほどよろしくお願いいたします。

TOPICS

新技術説明会に動物衛生研究所が発表

科学技術振興機構（JST）が主催する新技術説明会が平成23年6月7日（火）に東京市ヶ谷のJSTホールで開催され、当所を中心とした農研機構の研究成果7題が発表されました。当説明会は大学、公的研究機関の研究成果（特許公開中のもの）の実用化を促進するため、JSTが数万人におよぶメール会員やホームページを通じて民間企業等に参加を募り、発表後、その場で特許許諾に向けた個別相談を行うというものです。発表会は大学等の研究成果を中心に毎月数回開催されています。今回、初めての試みとして研究独法の研究成果をと

いうことで、当所に発表依頼があり、機構内の他研究所とともに農研機構新技術説明会～鳥インフルエンザ・BSE・食品機能性等～として取り組んだものです。当所からは「高精度なPCR法による鳥インフルエンザウイルスの迅速な重型判定」、「農場で利用可能な牛の脳幹機能検査技術」および「組換え型リゾチームの製造法」の3題が発表されました。当所・機構としても初めての試みであり、参加があるか危惧しましたが、会場がほぼ満員となる80人

以上の企業の方々の参加がありました。当所への個別相談も7件あり、特許許諾や共同研究の相談もあるなど極めて有意義な発表会となりました。

（病態研究領域長 八木行雄）

